

目的：幼児をとりまく人間関係が大きく変化してきているといわれる今日において、まず、幼児とその身近な保育者とが、日常生活によくある具体的な場面でどのように関わりあっているのかを明らかにすることにより、幼児をとりまく人間関係の質的な豊かさを生みだしていく一助としていきたい。本研究では、保育者のかかわり方について（家庭における幼児と母親の関わり場面から）その場面認識とふるまい方（行為）の点から考察する方法：①心理劇的方法による場面認識と行為についての分析、考察 ②質問紙法による分析、考察—「幼児の性格診断検査」（太郎、花子テスト）より、A「らくがき」B「子ども部屋」C「ご本」の場面の絵を示し、そこでの母親の役割をとっての認識と行為について、関係学より明らかにされている「五つのかかわり方」「自己、人、物との関係」の典型的、構造的パターンに対応する内容（その他も含む）を選択肢として設定した。対象は2歳から6歳の幼児の母親43名（本学幼児グループより12名、一般の幼稚園より31名）、本学大学生114名の計157名である。

結果：質問紙からは、各場面における保育者としての認識と行為は、その場面的構造や特性に影響される傾向があることがわかった。例えば、AやBの場面では、幼児の物関係的側面（ルールやしつけ）が意識され、どちらかという外側から認識しふるまってくる傾向がみられ、Cは、幼児の自己、人、物関係が展開し、幼児と保育者の人間関係の発展が促されやすい場面構造であることが考察された。また、心理劇により、保育者養成の方法として場面認識と行為の分化、統合的把握がさらにすすめられることがわかった。